

イエスが「二人の盲人を癒す」場面(マタイ 9:27~31)。この前後には、別の癒しの記述もある。盲人が「癒される」とは、実際の視覚の快復なのか、それとも、それ以上の何かを示しているのだろうか。

「二人の盲人が叫んで、[ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください]と言いながらついて来た(9:27)」。盲人の求めが必死であることは分かる。メシア(救い主)のイメージは「ダビデの子」。

千年前の英雄ダビデ王への憧れは思い切り拡大され、政治的な解放も、神的な治癒も一緒くたになっていた。

イエスは家に入り、二人の盲人に「わたしにできると信じるのか(9:28)」と問うた。「願望は何か」とは聞かず、ただ「信じるのか」とだけ問うた。二人は「はい、主よ(9:28)」と簡潔に答える。イエスが「二人の目に触り、[あなたがたの信じているとおりになるように]」と言うと(9:29)、「二人の目が見えるようになった(9:30)」。

見えるようになることが彼らの切なる願いだが、「信じる」ことが焦点のようだ。信じて何が変わるのか。その当事者が実際に答えることで、キリストの力は露わになる。

「問い」がイエスとの出会いであった(9:28)。求めるところ(9:27)に問いが与えられ、その問いに対して誠実に、真正面で受け答えすること。期待外れに備えて話半分にはせず、「はい、主よ(9:28)」と率直に踏み出すこと。するとどうだろう。心で信じるのが、盲目という現実の閉塞を打ち壊し、二人を解き放った。

問われることで、神の御前に立たされ、自分の姿を偽りなくさらし、二人は、盲目という人間の枠組みから、神のものになった。視覚快復という二人の願望を超えて、大きな恵みを得た。

イエスは盲人の目をどうやって開かせたか。「二人の目に触れ(9:29)」、彼らの「信じていること」が実現したわけだが、二人の目に触れたイエスの手はどのようなものであったろう。

イエスその人の手を思い描いてみよう。家業の大工(石工)を20年くらいはしていたから、ふしくれだってひび割れたごつい手であろう。そして、やがて十字架につけられる時には釘を打たれ、血が流される手。その手が二人の盲人の目に、「一人ずつ」触れた。

彼らはイエスの手によってキリスト(メシア)と結びついた。

一人ひとりの苦しみに、まさしくその部分に、十字架の御手が触れる。すると私の苦しみを通って、十字架の恵みが私の奥底に染みわたる。

この私を徹底して愛し、私の罪を赦し、私を贖うために死んで下さったイエスの十字架の御手が、私の苦しみの部分に触れる。なんという恵みの部分だろうか。

「彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた(イザヤ 53:5)」。まさに預言者の語ったことが、二人の盲人に起こった。

だが彼らには、その恵みの根拠までは分からなかった。「彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎(罪)のためであった(53:5)」。

二人は、他言無用と厳命されていたにもかかわらず(マタイ 9:30)、喜びのあまり「その地方一帯にイエスのことを言い広めた(9:31)」。彼らは、イエスの「釘が打たれる手」を見つめることはなかった。

私たちは、癒される当事者としても、癒しの現実を見る者としても、落ち着いて癒しの根拠にこそ注目したい。すなわち、「彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされる(イザヤ 53:5)」十字架に。



《おまけのひとこと》

ふしくれだってひび割れた手 その手が私たちの苦しみに触れる それだけでありがたい気になる 釘を打たれた手であったらどうだろう その血に その痛ましさに 恵みを感じるか 拒否するか